

西南学院小学校 学校長メッセージ

「学校通信 Wings 2019年4月号」

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

ヨハネによる福音書 第15章16～17節

1年生の皆さん入学おめでとうございます。在校生の皆さん進級おめでとうございます。

3月に70名の卒業生を送り出した後、70名の新入生と1名の転入生を迎えて2019年度の歩みが始まりました。今年度西南学院小学校は開校10周年を迎えます。これを機にこれまでの歩みを振り返り、更に充実した教育活動を展開することができるよう、職員一丸となって取り組んでまいります。

さて、随分以前から「個に応じた教育を」ということが言われてきています。今日の始業式でも、ジャガイモの芽にたとえて、子どもたちにも個性を伸ばさせることの大切さについて話をしました。「ジャガイモは放っておくといろいろなところから芽がでます。しかしそのままでは、どの芽にも栄養が十分行き渡らなくなって大きく成長することができなくなってしまいます。君たちもこれからいろいろなことに興味をもったり好きになったりするだろうけれども、そうした中から本当に大切にするものを選んでしっかり伸ばしていきましょう。」といった内容です。ただ、自分が伸ばすべき芽(個性)を見極めることはなかなか難しいことでもあると思います。親にしても、我が子のどんなところを伸ばしてやればいいのか迷うところではないでしょうか。私も男の子二人を育てましたが、そのことの難しさをつくづくと感じました。親がよかれと思っていても、本人がその気にならなければ決してうまくはいきません。

ただ、親としてまた教師としての経験から思うことは、できるだけよき出会いをさせていくことが大切ではないか、ということです。多くのよき出会いをするなかで、その子の内面に強く響くものがあれば、それがその子にとっての伸ばす芽となるのではないのでしょうか。ここで言う出会いとは、人とのことだけではなく、物や経験することも含まれると思います。また、直接的な出会いだけではなく、本や映画などを通しての間接的な出会いもあるでしょう。私たち大人は、よき出会いとはどのようなものか吟味し、できるだけそのような機会をつくっていくことが求められているのだと思います。その一方で、出逢わせたくないものについては慎重に避けさせることも大切だと思います。個に応じた教育とはそういうことではないかと思うのですがいかがでしょう。

ところで、「子どもの内面に強く響く」とはどういうことなのでしょう。「感動する」「感銘を受ける」など、その時々状況によって様々だと思いますが、考える手がかりになるものとして、最後に以前筑波大学大学院教授(当時)の茂呂 雄二氏が、「初等教育資料」(文部科学省編集)に書かれたあこがれることの大切さについての文章をご紹介します。

学びは知的働きであると同時に、感情的なプロセスでもある。とういうのも、**学ぼうとするときには、誰かにあこがれを感じてのことが多いからだ。**学びが「まねび」に由来し模倣に発するとはよくいわれるが、

この模倣はあこがれがひきおこす感情の過程でもある。想像力には、いまひとつ、この学びのはじまりの過程を支えるという重要な役割がある。

「先生嘗て坂本君の状を述べて曰く、豪傑は自ら人をして崇拜の念を生じせしむ、予は当時少年なりしも、彼を見て何となくエラキ人なりと信ぜるが故に、平生人に屈せざるの予も、彼が純然たる土佐訛りの方言もて『中江のニイさん煙草を買ふてきてオーセ』などと命ぜられるれば、決然として使ひせしことる屢々なりき」(幸徳秋水『兆民先生・兆民先生行状記』岩波文庫)

この一文に記されているのは中江兆民の少年時代の思い出である。ここには、兆民の龍馬へのあこがれがよく表れている。あこがれは、一緒にいたい、行動をともにしたいという欲求の情動であり、アクションの原動力である。同時に、その人と一緒にいることは、喜びの感情を更に強めるにちがいない。あこがれは、感情でもあり実践でもあり、私たちのライフ(生活といのち)が生き生きと動き始めるときに見せる二つの顔だといえる。

ところで、兆民はなぜ龍馬へあこがれを抱いたのだろうか。じつはその理由は兆民自身にも分からない。情動は、何かに外から影響されて始まる動きである。情動は、半分欠けた絵や原因のない結論に喩えられてきた。何が原因でそうなったのか分からない衝動なのである。しかし、想像力をもちいることで、原因を解明はしないものの、衝動を探究アクションの展開につなげることができる。あこがれの対象の人物をなぞることで、それまでとは違う創造的なアクションが可能になるのである。〔太字化(強調)は宮崎〕

小学校の6年間に、学校でも授業や行事を通して一人ひとりの子どもたちによき出会いをさせていきたいと思います。どうか今年度もご理解とご協力よろしく申し上げます。

(文責：宮崎 隆一)